

STAGE+を楽しむ(177)(HP 収載)
—ベームのモーツァルトの交響曲第 28 番—

1. 始めに

前報(176)に引き続き、STAGE+のカール・ベームのモーツァルトの交響曲第 28 番の演奏の試聴を実施します。

2. 試聴音源

今回はカール・ベームのモーツァルトの交響曲第 28 番の演奏を選びました。

カール・ベームが振るモーツァルトの交響曲第 28 番

ウィーン・フィル

収録日: 1970 年 9 月 18 日

1970 年 9 月に撮影された本映像には、カール・ベームがウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を率い、モーツァルト初期の交響曲第 28 番を演奏した模様が収められています。この曲は、ザルツブルク時代の最後に書かれた交響曲の一つです。ベームのモーツァルトに対する深い愛情と理解にインスピレーションを与えたものの一つには、リヒャルト・シュトラウスとの共同作業があり、ベームによるモーツァルト演奏、特にウィーン・フィルの比類なき音楽家たちとのコラボレーションは、天性の音楽性と権威を表す代名詞となりました。

演奏:

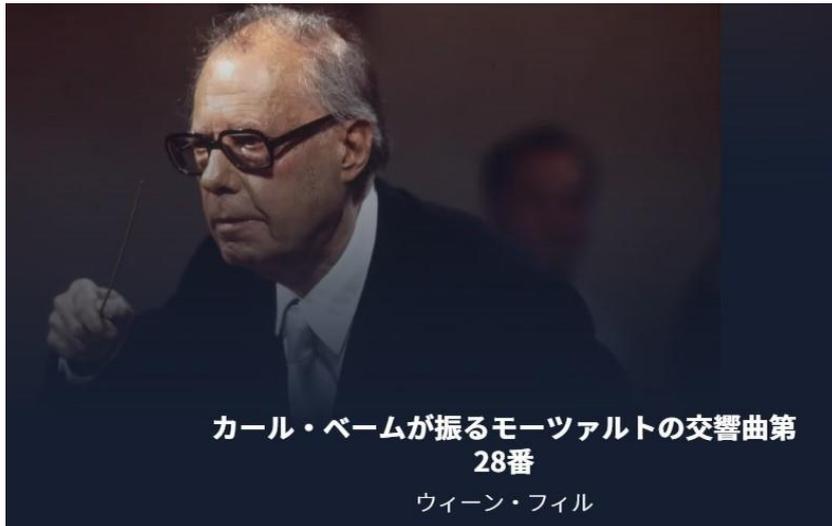
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

指揮:

カール・ベーム

曲目:

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト 交響曲第 28 番ハ長調 K. 200/189k



3. 試聴の経過

前回に引き続き、これまでに実施してきた対策に加えて、アースアキュライザーの活用(6)で報告しましたようにアースの再構成を実施し、AV ドーナッツも使用しています。

1970年のウィーン楽友会館での収録です。

ベームのアナログ盤はLONDON盤がほとんどでグラモフォン盤はみたことがありませんので、STAGE+の配信が見つかったのは幸いです。

1970年の収録ですが、ウィーン・フィルらしい音がしていますし、ベームの指揮は派手なアクションはなく端正で折り目正しく、アナログ盤のイメージどおりの表情がでています。



4. まとめ

これまでに実施してきた対策に加えて、アースアキュライザーの活用(6)で報告しましたようにアースの再構成を実施し、AV ドーナッツも使用した結果、ベームの端正な指揮どおりの表情が音に現れています。

以上